

畫家リ氏は余が歸國の際再會の日を待つと云はれしが、余未だ發せざるに噫々恩師は七十有餘才を以て遂に天國の人となつてしまつた、同時に僕が再渡米のたのしみは消失せて、此れを記す時だも慈愛深き師の面影の偲ばれて轉た落涙に咽ぶのである。尙ほ北齋翁を酒家のやうに書いてあつたが、翁は元來甘黨であるから序に訂正して置く。

△ △ △

適當の色は人心に活潑愉快の感覺を興へるものである、人間の視感に色に對して活動を起すもので、ある種類の色は眼の健全に欠くべからざるもの、又腦の健全は視官の感覺によつて生じたる神經の作用如何に關係すること尠からぬもので、然かも神經の作爲は色の種類によつて差異のあるものである。

凡そ神經は赤色を見る時に亢奮し、綠色を見る時に慰安し、藍色を視る時に殆ど麻痺するが如く、黄色を視る時は視官の感覺を強くし、白色を視る時は開豁の情を發し、光の薄弱なる時は疲倦し、光の過敏なる時は注意力を薄弱ならしめ、且不安の心活動の情を起し、陰影にある時は精神をして注意思考並に休息に適せしめ、暗黒なる時は鬱憂の念を生ぜしむるといふことである。元來人の精神は感覺によりて變動を生ずるものであつて適當の色を見ざる時は精神の活動を來すことば無いので、赤色は然かも疲倦したる機能をして健康の作爲を生ぜしむるも眼に適當したる色なのである、若し室内に在て久しく視力を勞したる後、大空の藍色を見、又遠方の風景を見る時は、眼は之に滿

足して視力を慰勞せしむることが出来る、而して色の變換は實に必要なるものであつて、視力は色によりて慰撫することを得る、即ち清爽壯快なる遠隔の色にして、黃白明暗を混合したるものを見る時は、安息することを得るのである。

久しく純黒なる或は純白なる室内に閉居する時は、白痴又は鬱性り病を生ずる傾向があるといふことである、沙漠或は積雪の白き閃光によりて失明したる例もあり、又暗黒なる獄舎に閉居し、發狂したる實例もあり、綠色の覆面紗に代ふるに褐色を用ゐて實効を收めた學者もある。要するに人の健康及快活を得んと思つたならば、色の撰擇は審美學の學理に基き、正當なる感覺に適し、天然の眞理に従はねばならぬ云々（關以雄氏『色と衛生上の關係』小學校）

△ △ △

一部の評家より極端なる理想派と稱せられし雅邦翁のことなれば、形似に腐心せざりしやうに思はるれど、一面に於ては大に寫實を重んじ、時には洋畫家も及ばざる實物寫生を試みたり。去る二十八年京都の博覽會に出品せりし猛虎の圖は、當時の批評界を賑はして、褒貶の聲なか／＼に喧しかりき、翁は彼の畫を描かん爲に、毎日動物園に通ひ、猛獸咆哮の姿態を寫さんとなしけるが、長く檻中に封じられし虎は、自然に猛烈の氣を失し望みの姿を呈せざるより、翁は構圖に非常の苦心をなし、種々の寫生を參照して件の圖を得たるなりと。（日本美術）